

講演会のお知らせ

下記の要領で講演会がおこなわれます。会員諸氏はふるってご参加ください。

講師：中山 茂 会員（神奈川大学）

演題：「大学資本主義 Academic Capitalism」

日時：2月27日（火）午後2時半から5時

場所：京都大学経済学部会議室

連絡先：八木研究室 yagi@econ.kyoto-u.ac.jp

『大学史研究通信』バックナンバー希望者に頒布いたします

『大学史研究通信』第14号～現在発行号まで希望者に頒布いたします。80円×部数
+郵送料（1部の場合90円、2部以上は120円）分の切手を同封の上、編集担当進藤
宛までご請求下さい。ご連絡は最終ページをご覧ください。

編集後記 『通信』第24号をお送りいたします。原稿締切直前にたくさん入稿があり、
レイアウトの都合上、編集後記をこれ以上長く出来ない状態です。お許しを。（進藤記）

『通信』編集は事務局・進藤修一が担当しております。

連絡先〒562-8558 大阪外国語大学外国語学部 進藤 修一研究室内

TEL/FAX 0727-30-5355 EMAIL sshindo@pop13.odn.ne.jp

『大学史研究通信』第25号は、3月31日発行予定です。

大学史研究会事務局

〒192-0003 八王子市丹木町1-236 創価大学教育学部 坂本辰朗研究室内 大学史研究会
TEL 0426-91-4602 FAX 0426-91-9309 EMAIL sakamoto@s.soka.ac.jp

大学史研究会事務局員（五十音順）

阿曾沼 明裕（名古屋大学）

大川 一毅（早稲田大学）

児玉 善仁（帝京大学）

進藤 修一（大阪外国語大学）

橋本 鉱市（大学評価・学位授与機構）

飯野 靖夫（日本鯨類研究所）

木戸 裕（国立国会図書館）

坂本 辰朗（創価大学）

塙原 修一（国立教育研究所）

大学史研究通信

第24号、2001年1月31日（水）

大学史研究会

第24号の内容：新入会員、会員ニュース・新入会員自己紹介・会員関係出版情報・第
23会大学史研究セミナー参加記・国際学会記事・国内学会記事・新刊紹介・事務局通
信担当からのお知らせ・講演会のお知らせ・『大学史研究』第17号原稿募集要領・編
集後記・大学史研究会事務局員一覧

新入会員（敬称略）

専門分野 (1) 教育社会学 (2) 旧制高等学校

近田 政博（名古屋大学高等教育研究センター）

専門分野 (1) ベトナムの高等教育改革 (2) アジア諸国の高等教育比較
(3) 大学教養教育カリキュラムの改革

会員ニュース

阪田 蓉子 会員（住所変更）

谷本 宗生 会員（住所・所属変更）（誤植のため再掲）

所属：金沢市史資料調査員

森岡 ゆかり 会員（住所・所属変更）（2001年2月22日～2003年1月予定）

所属：中国文化大学外国语学院日文系・日本研究所 助理教授

大学所在地 台北市士林區陽明山華岡路55號

TEL・FAX 886-(0)2-2862-3155〔日文系直通〕

新入会員自己紹介

五島 敦子（名古屋大学大学院）

アメリカの大学開放・継続教育に関心をもち、現在は、19世紀末から20世紀初頭に生成・展開された大学拡張運動をテーマに研究を行なっています。

「大学拡張(University Extension)」と申しますと、従来は、大学で学ぶことができない学外の人々に教育・研究・施設を開放する方策として、社会教育研究で注目された対象です。しかし、たとえばシカゴ大学では、創立時(1892年)に"University Extension Division(大学拡張部)"が設置され、学内主要組織のひとつに位置づけられたように、"Extension"は、アメリカの大学にとって不可欠の機能でした。いわば、アメリカ的な大学の理念とされる「サービス」を具体化する方途だったのです。したがって、"Extension"の歴史像を明らかにするには、それがどのような大学の変化を背景に生まれたのか、また、その発展が大学と社会の関係にいかなる変化を迫り、新たな転換の土台を形成したのか、という大学史からのアプローチが必要と思われます。

この課題設定は、近年日本でも激増している大学開放部局、あるいは、社会人特別選抜などの種々の開放施策が、大学それ自身にとって、そして、学習者にとって、どのような意味をもっているのかを探求したい、という関心に基づいています。歴史研究とともに、長期的には、非伝統的である私自身の経験を踏まえ、学習者主体の大学開放のありようについても研究したいと考えております。

なにぶん未熟者ですので、会員の皆さんには、ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

横山 勝会員（横浜家庭裁判所）

この度、大学史研究会への入会をご許可いただいた横山と申します。

現在、家庭裁判所で、家庭裁判所調査官という職に就いており、普段は非行を犯した少年と面接しております。

こんな私が大学史に興味を持ちはじめましたのは、10年ほど前第二次世界大戦前の慶大にあった慶應義塾消費組合の研究に参加したことからです。

その後、いくつかの大学の歴史に興味を持つようになりました。日本の大学によつては（その大学が比較的長い歴史を持っている、いないにかか割らず）、その大学の成立過程や諸研究所の沿革、研究会・学会等の各会のテーマ・発表者について、その保存にあまり関心を示されていない場合があるように感じました。

こうした情報の保存については、後にそのことがどう評価されるかが定まる以前に、時が経つに連れ、その大学にいた方たちですら、明確な記憶を持てなくな

保存したフロッピーを希望します。あるいはMS-DOS文書形式でも結構です。それが難しい場合は、適宜な形式で保存したフロッピーをお送りくだされば事務局で変換をこころみます。

(2) 用紙はA4を縦に使用して横書き、字詰めは自由ですが、おおむね40字35行とします（刷り上がりがそうなるとは限りません）。

(3) 第1頁の最初の5行ほどに表題と著者名（カッコ内に所属機関と部局名）を書き、1頁目にかぎり本文は6行目から書きます。

(4) 図表は別紙とし、本文の挿入個所に図表をレイアウトする空白をあけます。図表はそのまま製版します。

(5) 章、節の番号は大きい方から順に、I. II. III. ……、1. 2. 3. ……、(1) (2) (3) ……とします。

(6) 使用する文字種は、全角の漢字かな英数字、半角の英数字、注番号に使う上付き数字などとします。英数字は、1文字（1桁）の場合は全角文字、2文字（2桁）以上連続する場合は半角文字を原則とします。外字の使用は控えてください。

なお、MS-DOS文書形式のファイルの場合は、イタリック、アンダーライン、あみかけなどは、印刷出力に指定を書き入れてください。

(7) 注と文献表は論文の末尾につけます。注番号は上付き数字の1, 2, 3, ……とします。

邦語文献は、書名、雑誌名を『』、論文名を「」でくくります。

外国語文献の書名、雑誌名は、イタリックを指定してください。

4. 原稿の締切などは、そのつど「大学史研究通信」に掲載します。常例では、執筆希望の申込が毎年4月中旬まで、原稿の締切が5月末頃となっています。

（今回は上記の通りです）

5. 原稿送付、お問合せは、第17号については、事務局の坂本まで（連絡先は最終ページ参照）お願いいたします。

附言十二）員長選挙会次回定期大

（現行）選舉本日
（請書回収回立付）
（準大選舉）
（研究部會回立付）

（准大選舉）
（準大社部早）
（準大）
（准大東帝）
（准大臨國）
（准大國立早・源平オズ）

原稿募集

『大学史研究通信』第25号は2001年3月31日に発行予定です。会員諸氏の現在の研究紹介、文献案内、会員主催の行事のお知らせなど、どのようなものでも結構です。皆様からの投稿を心よりお待ちしております。原稿・お問い合わせ等は通信担当者の進藤までお願ひいたします。連絡先は最終ページをご覧ください。

住所・所属変更届のお願い

住所や所属（昇任・学位取得も含む）に変更のある会員は「通信」担当者進藤までご一報くださるようお願いいたします。教授・研究のために海外にご滞在予定のかたも、海外での連絡先をお教えいただけましたら幸いです。ご連絡は最終ページにございます、進藤研究室宛にお願いいたします。

『大学史研究』第17号の原稿募集のお知らせ

『大学史研究』第17号の原稿を募集いたします。投稿規定をご参照のうえ、ふるってご応募くださいますようご案内申し上げます。投稿をご希望の方は、下記投稿・執筆要領をご参考のうえ、2001年5月7日までに事務局に表題をお知らせください。原稿締切は2001年7月31日（厳守）とします。なお、発行予定を厳守するために、締め切り以降編集部に届いた原稿は事情を問わず次号送りとさせていただきますのでご了承ください。

『大学史研究』投稿・執筆要領

1. 「大学史研究」への会員の投稿を歓迎します。
 2. 和文原稿は20～30枚(400字詰換算)の分量を標準とし、英文題名と英文著者名を記した別紙を添付するものとします。和文でない原稿も同様の分量(刷上り6～9頁)を標準とし、和文題名と和文著者名を記した別紙を添付するものとします。また、読者の便宜のため、充実した和文要旨を添付することをお勧めします。
 3. パソコン、ワープロを利用できる方は下記要領で原稿を作成して、フロッピーと印刷出力をお送りください。事務局で一括して印刷しなおして版下を作成します。フロッピーは返却します。手書きの方は、入力作業に多少の時間を要しますので早めにご提出ねがいます。
- (1) ワード(マイクロソフト)あるいは一太郎(ジャスト・システム)の通常文書で

くなり、それを復元するのが難しいように感じております。各大学では、面倒なようでも、大学が発行している広報誌だけでなく、パンフレット類や研究会等のレジュメを残していくだけだと良いかと思っております。

このような私ですが、研究会の先生方の末席で、大学史について学んでいきたいと考えておりますので、どうぞ、今後とも宜しくお願い申し上げます。

会員関係出版情報

(今回は編集担当進藤が調査した限りのものを掲載いたしました。次号からは会員諸氏からの情報提供をお願いいたします)

Maskoto Ikeda, Yoshio Inoue, Tamotsu Nishizawa, Susumu Yamauchi(eds.), Hitotsubashi University, 1875-2000, Macmillan Press 2000, ISBN 0333764897
(分担執筆者 細谷新治会員)

望田幸男・安原義仁・橋本伸也監訳『高等教育の変貌 1860-1930—拡張・多様化・機会開放・専門職化』昭和堂、2000年10月出版、ISBN:4812200296 (監訳: 望田幸男会員、安原義仁会員、橋本伸也会員、翻訳: 福石賢一会員、大中里勝美会員)

ユルゲン・コッカ『国際比較・近代ドイツの市民—心性・文化・政治』望田幸男監訳、ミネルヴァ書房、2000年10月出版、ISBN:4623031551 (監訳: 望田幸男会員、翻訳: 森田猛会員)

望田幸男、碓井敏正編『グローバリゼーションと市民社会—国民国家は超えられるか』文理閣、2000年11月出版、ISBN:4892593729 (編者: 望田幸男会員)

エリック・リーヴィ『第三帝国の音楽』望田幸男監訳、田野大輔、中岡俊介訳、名古屋大学出版会、2000年12月出版、ISBN:4815803978 (監訳: 望田幸男会員)

橋本伸也・藤井泰・渡辺和行・進藤修一・安原義仁『エリート教育』(近代ヨーロッパの探究)ミネルヴァ書房、2001年1月出版 ISBN:4623032825 (著者: 橋本伸也会員、渡辺和行会員、進藤修一会員、安原義仁会員)

第23回大学史研究セミナー参加記

進藤 修一（大阪外国語大学）

2000年11月24日（金）～11月26日（日）の日程で、二十世紀最後の大学史研究セミナーが開催されました。本年度は鹿児島県・志學館大学の二見剛史先生を大会実施委員として、同大学及び鹿児島空港ホテル・鹿児島空港会議室の三箇所を活用しての大会となりました。

まずはじめに大会当番校である志學館大学について少しこメントをさせてください。志學館大学は、同大学のほかに、鹿児島女子短期大学、鹿児島学芸高等学校、志學館高等部・中等部、いくつかの幼稚園を擁する学校法人志學館学園に所属しています。旧・鹿児島女子大学が、二年前に共学に改組し、現在の大学名・志學館大学となったものです。改組の際に法学部が新設され、既存の文学部とあわせて二学部を擁する大学となっています。文学部は国文学科・英文学科・人間関係学科、法学部は法律学科から構成され、その他に共通教育課程として日本語教員養成課程も設置されています。さらには二見先生が責任者をつとめる志學館大学生涯学習センターも設置されており、大学が、研究教育活動の成果を地域に積極的に提供していくという姿勢を感じられました。これらの施設が何万坪（すいませんが詳しい数字は失念しました）にもわたる敷地に設置されています。校門をくぐってから建物までの、これでもかというほどの距離は、日本の大学とは思えないほどで、これだけでもそのひろさを十二分に納得させるものでした。

志學館大学は鹿児島空港からは車で20分たらずのところにあります。志學館大学がある隼人町やその近隣の溝辺町、国分市は、鹿児島県のなかでも近年もっとも著しい発展がみられる地域で、ファナックや京セラなどの有名企業もあります。なお、鹿児島空港は札幌、東京、名古屋、大阪、広島、福岡などの主要都市および鹿児島県の各離島・沖縄と結ぶ地方交通の中核となる大空港で、ここから大阪まで空路1時間10分、東京まで1時間45分です。大阪郊外の拙宅から伊丹空港まで1時間30分、その後東京までは50分、新幹線でも京都駅まで30分、その後2時間40分を必要とすることを考えると、志學館から東京へむかったほうが早いことになります。空港から大学へいたる道からは一面に広がる茶畠が見渡せました。タクシーの運転手さんが「茶は静岡茶が有名ですが、鹿児島は実はお茶の一大産地なんです」と説明してくれました。その車内では11月末だというのにクーラーが入っており、奇しくも運転手さんの言葉が裏付けられているようでした。

大会開始前に、学内を見学しました。学生は総じて礼儀正しく、これは女子

でのアルヒヴァールが存在したとすれば、こうした学籍簿の破壊ははやくから防止できたであろう。またマイクロフィルムを作成する作業もはやくから行われ、本書の刊行ももつとはやくに実現し、その成果はもつとはやくに一般の研究者に公開されていたことであろう。

しかし、本書はアルヒーフもアルヒヴァールも存在しないところで、試行錯誤のなかから生まれたのである。「刊行のことば」を読めば苦労に苦労を重ね、いわば闇夜を手探りで歩いていたことがよく分かる。ここでとくに高く評価されるべきは（繰り返しになるが）本書に採録する対象を卒業生に限定することなく「在籍者」に拡大したこと、しかも学生の本籍地を含め可能な限り収集データの範囲を広げたことである。本書が他の同窓会名簿と同じく愛校心の産物であることは間違いない。しかし、たとえ愛校心の産物でも、ひとたび刊行されるや、それは一瞬にして歴史に関心をもつものの共同財となり、史料としての自己主張をはじめ、その史料としての有効性の度合いは収集データの範囲の拡大に比例する。もし、他の旧制高等学校や旧制大学でも（同窓会名簿に依拠するのではなく）学籍を原史料として、そこに「学んだ人びと」の一覧が作成されるとすれば、収集データの範囲は可能な限り拡大されることが望ましい。仮にそれが望めないとしても、本書に刺激され、旧制の教育機関の学生名簿がひとつでも多く刊行されることを期待したい。そのさい理想的なことは既存の同窓会名簿に依拠するのではなく（繰り返しになるが）本書のように直接「学籍簿」を原史料とすることである。つまり学校史の同窓会からの解放である。

（さらにいえば大学史は最終的には大学から解放される必要がある。）「刊行のことば」を読めば分かるように、本書の原史料である学籍簿は鹿児島大学法文学部の協力があってこそマイクロフィルム化も可能となったのであるが、本書は別に鹿児島大学の委託をうけて作成された訳ではない。単にひとつの研究会の作品にすぎない。しかし、逆にいえば、十分な予算の裏付けのない在野の研究会がこれだけの成果をあげたのである。このことはいくら高く評価しても高すぎるということはない。また、学籍簿を原史料として用いた手法は史料編纂の正攻法をとったことを意味するが、このこともいくら高く評価しても高すぎるということはない。本書のマイナス点をあげることは容易である。しかしこれまで触れたプラスの点を見逃すことは許されないのである。では本書の最大のプラス点は何か。それはとにかくにも（これだけの拡大データを収録して）本書を刊行したという事実につきる。たとえ追加訂正表をつけたにせよである。仮に七高史研究会が完全主義者の集団であったとすれば、本書は永遠に刊行されなかつたであろう。「刊行のことば」の末尾に本書は情報の「受け皿」とある。しかし、本書の刊行主体である七高史研究会が改訂版を出すことはきわめて妥当であると考える。

し、史料調査のさい適切な助言を得ることができる。筆者もディプローム試験出願
合格者一覧の作成にあたり、史料の内的・外的批判についてアルヒヴァールから
助言を受けることができた。

しかし、わが国には文書館はあるがアルヒーフ・シューレがない。したがつて日本古代史、日本中世史、日本近世史を専攻した学士または修士一換言すれば学部と大学院で史料批判の手法を学んだ日本史家一が大学アルヒーフを含め各地の文書館に多数採用されることが望ましい。そして現場でアルヒヴァールの訓練を受け、最終的には来訪する研究者に適切な助言を与えるようになることが切望される。

ところで本書は「刊行のことば」の冒頭にあるように「同窓会名簿」として刊行されたものであるが、同窓会名簿は一出版社が刊行する人名事典と同じく一ひとたび刊行されるや史料として独立した存在となる。本書には第一次近衛（文麿）内閣の農林大臣と鈴木（貫一郎）内閣の農商大臣をつとめた石黒忠篤（第一回卒業生）以下少なからず知名人が含まれているが、本書の特徴は明治34年(1901)9月の入学生から昭和23年(1948)4月の入学生までの在籍生すべてが網羅されていることである。つまり単なる卒業生名簿ではなく、文字通り「第七高等学校造士館で学んだ人びとの一覧」である。したがって、ここに採録された人びとに関しては（石黒忠篤など人名事典に出てくる人物を別として）本書なくしてその個人データを知ることができない。この意味で本書は旧制の高等学校の歴史はもとより日本近代史の分野の貴重な史料である。また、20世紀前半の日独の比較教育史の史料、たとえばわが国の旧制高等学校とドイツのギムナジウムの在籍生徒の構成の比較研究の史料ともなり得る。

一方、本書には6頁におよぶ追加訂正表が付されている。これはこれで大変結構なことであるが、それだけたくさんの「要修正」の箇所があった訳である。この量は一般的許容範囲をはるかにこえている。これだけ追加訂正が必要であったとすれば、外部からみて、追加訂正の「追加」の必要が想定されるのである。

本書がこのような制約をもつのは残念なことであるが、以下に触れるように、これはむしろわが国の文書館制度の立ち後れの反映と見るべきである。むしろ本書を手に取った率直な感想は、この遅れた文書館制度のもとで、さらには「刊行のことば」に述べられているさまざまな制約のもとで、よくぞ刊行にまでこぎつけたものだということである。

「刊行のことば」によれば本書の原史料は鹿児島大学法文学部蔵の第七高等学校造士館学籍簿である。本書を刊行した七高史研究会のメンバーがこの学籍簿を「発見」したとき、この学籍簿の一部は虫食い状態にあり、一部は紙の劣化が始まっていたという。仮にわが国の大學生にアルヒーフがあり、専門職とし

大時代以来の伝統でしょうか。共学化によって男子学生がもたらすあたらしい活気もあると思いますが、よき伝統は守っていってほしいものです。なお志學館大学のHPは <http://www.kwc-u.ac.jp/> をご覧ください。

さて、肝心のセミナーですが、第一日目[11月24日(金曜)]は自由研究発表Iが、志學館大学、コスモス・ホール4301教室でおこなわれました。仙波克也先生（広島大学）の司会、中山茂先生（神奈川大学）をコメンテータとして福留東土氏（広島大学大学院）「アメリカの大学におけるビジネス・スクールの成立」渡辺かよ子（愛知淑徳大学）・楠元町子（名古屋市立若水中学校講師）坂東江里子（Kプロジェクト書記）・矢島洋子（金城学院大学大学院生）柳沢幾美（愛知学院大学大学院研究員）（口頭報告は代表して渡辺かよ子氏）「1904年セントルイス万国学術会議について」がおこなわれました。

いつもの大学史研究会と同じく、報告者が話している途中にどんどん質問が入り、活発な議論が交わされました。これには、新入会員の福留氏もちょっと調子が狂わされたのではないかでしょうか。しかし、同じ立場に立たされてあわてふためいた数年前の私とは違って、氏はどうどうとした受け答え。将来が楽しみです。渡辺先生は、ベテランらしく（失礼！）これまた立派な応答。最後は前夜祭会場へのバスが迎えに来るということで、議論を切り上げやむなく志學館大学をあとにしました。19時からはバレル・バーPRAHA&GENで前夜祭。このお店は本来焼酎の醸造元だったのが、ご当主がチェコのビールに惚れ込んで、チェコ風のビール醸造所とレストランを作ってしまったのだとか。そこへ、東京へあったチェコ観光局が是非お世話になりたいと移転。チェコ人スタッフもあり、われわれのテーブルにもひとりついてくれました。ドイツ語もできるそのスタッフと瀧井氏がしばし言葉をかわしていました。どうも瀧井氏もウイーン滞在時にチェコビールに惚れ込んだようでした。

第二日目[11月25日(土曜)]は前夜の疲れもなんのそので、開始されました。本日は会場を変えて宿泊していた鹿児島空港ホテルというのも便利でした。まずは七高史研究会事務局平田信芳氏の特別講演「戦後の七高生」。郷土鹿児島の歴史をおりこみつつ七高生についての興味深い話しを聞かせていただきました。本年度の課題研究は「地域と大学」ということもあり、非常に意義のある講演でした。ひきつづき二見剛史会員（志學館大学）が司会・コメンテータを務め、折田悦郎会員（九州大学）「地域と大学…九州帝国大学の場合」、安原義仁会員（広島大学）「オックスフォード大学大学拡張運動とブリストル・ユニバーシティ・カレッジの設立」と、日英の地域と大学についての報告がありました。

課題研究報告終了後、総会、懇親会、二次会・三次会、、、と長い夜は更けていきました。

第三日目[11月26日(日曜)]は、鹿児島空港国内線ターミナルビル「エアポート3FホールC」へとさらに会場を移し、別府昭郎会員(明治大学)の司会、進藤がコメンテータを務め、自由研究報告IIをおこないました。自由報告はドイツ史研究二本で、早島瑛会員(関西学院大学)「ドイツの大学(大学史)において卒業生(卒業試験合格者)を如何に特定するか」、田村栄子会員(佐賀大学)「ナチス時代の大学における女性と医学」の報告。三日間の締めくくりにふさわしいすばらしい報告が続きました。

空港内という帰宅にもってこいのロケーションにもかかわらず、鹿児島空港発路線は大変混雑しており、進藤をはじめ直接目的地へ帰り着くことができなかつた会員が多数いた模様です。

会員の参加者は以下の通り(敬称略)。阿曾沼明裕、池端次郎、折田悦郎、阪田蓉子、坂本辰朗、進藤修一、仙波克也、瀧井一博、田村栄子、塚原修一、中山茂、羽田貴史、早島瑛、福留東土、二見剛史、別府昭郎、安原義仁、吉永契一郎、吉野剛弘、渡辺かよ子。なお、会員以外にも次の方が参加された。瀬戸内裕子(志學館大学文学部人間関係学科2年)、竹内未来(同)、中江あやの(同)、堀切トメ子(志學館大学文学部人間関係学科4年)。

<国際学会記事>

国際歴史学会議及び史学史歴史理論国際学会

佐藤 正幸(山梨大学)

国際歴史学会議(International Congress of Historical Sciences)の第19回大会が、2000年8月6-13日、ノルウェーのオスロ大学で開催された。

国際歴史学会議は、1900年に結成された、世界で最も古く、かつ世界最大規模を誇る国際的な歴史研究組織である。1900年に第1回大会をパリで開催し、その後、戦争による何回かの中止をはさみながらも20世紀を通して、平均して5年に一回の大会を開催し続けてきた。

この学会は、世界各国の歴史学委員会(日本では日本学術会議歴史学研究連絡委員会に設置されている国際交流専門委員会CISH小委員会)と、歴史研究に関する約80の国際学会をその母胎とする組織で、歴史研究を国際的に統括する組織である。オスロ大会では、全体会と特別セッション、ラウンドテーブル、及び各国際学会が主催するセッションが8日間にわたって開催された。次回の第20回大会は2005年にオーストラリアのシドニーで行われる。

オスロ大会では、全体会は3つのテーマで組織され、二日目のテーマ"Millennium, Time and History"の午前中の部"The Construction and Division of Time"は、佐藤正幸(山梨大学)が主催し、基調講演を行った。講

(選出)

第6条 役員は、総会で選出する。

(総会)

第7条 本会は年1回総会を開き、次の事項を審議する。

- (1) 事業計画並びに予算に関する事項
- (2) 前年度の事業報告並びに決算に関する事項
- (3) 役員の選出
- (4) その他、必要と認めた事項

(会費)

第8条 本会の経費は、会費・寄付金その他を持ってこれに当てる。

第9条 会員は会費を払わなくてはならない。

(会計年度)

第10条 本会の会計年度は、毎年4月1日にはじまり、翌年3月31日に終わる。

(変更)

第11条 本会則の変更は、総会の議を経なければならない。

付則 本会則は、2000年12月10日よりこれを実施する。

<新刊紹介>

七高史研究会(編)『七高造士館で学んだ人びと』(名簿編)、七高史研究会、2000

年12月12日刊、14+494+60頁。

早島 瑛(関西学院大学)

「ドイツ言語文化における商科大学の社会史」として、これまで、ライプチヒ、ザンクトガレン、ケルン、フランクフルト、ベルリン、ミュンヘンの商科大学の学生文書と試験文書を中心にして「ディプローム・カオフマン一覧」を作成してきた。日本の旧制高等学校とドイツの商科大学の違いはあるが、ひとつの教育機関で「学んだ人びと」の史料研究という点で共通しているので、この立場から本書の刊行について考えたところを記して「新刊紹介」としたい。

ドイツの商科大学のディプローム試験に合格した学生の名簿は商科大学の卒業生名簿(の一部)であり、もし商科大学の同窓会が存在し、仮に卒業生の全員が入会したとすれば、この名簿は同時に同窓会名簿となる。したがってドイツの商科大学でディプローム試験に合格した学生の史料調査は卒業生名簿や同窓会名簿の作成作業と重なりあう。名簿のなかのデータはそれ自体ひとつの史料であるから、名簿の作成は史料編纂の作業を意味する。したがって史料編纂の前提となる史料批判なくして名簿を作成することはできない。

ドイツの大学はアルヒーフ(Archiv)をもち、アルヒーフにはアルヒーフ・シューレ(Archivschule)を卒業した専門職としてのアルヒヴァール(Archivar)が存在

演の内容については、『歴史学研究』2001年6月号の「特集オスロ国際歴史学会議」に掲載の予定である。

日本からは約150人が参加し、日本人の発表は20件を越え、かつてない盛況であった。中でも、佐藤次高（東京大学教授）主催によるイスラム社会に関する特別セッション、速水融（麗澤大学教授）主催による歴史人口学に関する特別セッション、油井大三郎（東京大学教授）主催による太平洋研究の特別セッション等、日本人歴史家の主催するセッションが幾つも行われたことは注目に値する。

最終日には史学史歴史理論国際学会 (International Commission for the History and Theory of Historiography) が開催され、Hayden White (カリフォルニア大学名誉教授) が "The Historical Sublime" と題するセッションを主催した。会議後の総会で2000-2005年度の役員改選が行われ以下のように決定した。

会長：Richard Vann (ウェスレリアン大学名誉教授)

副会長：Irmline Veit-Brause (ディーケン大学教授)

事務総長：佐藤正幸 (山梨大学教授)

企画担当理事：Michael Bently (セント・アンドリュース大学教授)

会計担当理事：Eva Domanska (ポツナン大学教授)

史学史歴史理論国際学会は、これまでプロジェクトの一つとして、20世紀における学問としての歴史学の発達は大学という新しい学問制度の世界的伝播にどのように依拠しながら展開してきたかというテーマを追求してきた。19世紀後半からドイツを中心に始まった史料に基づく実証研究という歴史研究スタイルの世界的伝播は、大学という制度を抜きにして考えることは出来ない。大学史研究会との連携が新たな研究の展開を可能にしてくれるようと思える。

<国内学会記事>

「史学史学会の創設」

昨年8月上旬にオスロで開催された「史学史歴史理論国際学会」(International Commission for the History and Theory of Historiography)の総会において佐藤正幸氏が事務総長(General Secretary)に選出された。これにより、わが国でも史学史研究の分野で学会を組織する動きがすすみ、昨年12月10日、大阪ガーデンパレスにおいて佐藤正幸、渡辺和行、芝井敬司の3氏と早島瑛が集まり「史学史学会」が創設された。会則にもあるように、この学会は「史学史歴史理論国際学会」の日本支部の性格をもつ。事務局の所在地および

最初の2年間の役員5名は以下の通りである。

事務局 山梨大学教育人間科学部 佐藤 正幸 研究室

400-8510 甲府市武田4-4-37

E-Mail : masayuki@grape.kkb.yamanashi.ac.jp

Tel/Fax: 055 220 8161

会長 佐藤 正幸 氏 (山梨大学)

副会長 渡辺 和行 氏 (奈良女子大学)

芝井 敬司 氏 (関西大学)

理事 (会計) 森田 猛 氏 (弘前学院大学)

理事 (庶務) 早島 瑛 氏 (関西学院大学)

この5名のうち4名までが大学史研究会の会員である。史学史は大学史と密接な関係にあるので、この分野に关心のある大学史研究会の会員に対して積極的に入会をおすすめしたい。連絡先は上記の事務局である。会則は以下の通り。

(文責・早島瑛. 2001.1.15.)

史学史学会会則

(名称)

第1条 本会は、史学史学会と称する。

(目的)

第2条 本会は、歴史学に関する学説的・理論的研究を行い、あわせて会員相互の連絡をはかることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

(1) 研究会・講演会等の開催

(2) 資料の収集交換

(3) 史学史歴史理論国際学会の日本支部としての活動

(4) 会報の発行

(役員)

第4条 本会は次の役員を置く。

(1) 会長 1名

(2) 副会長 2名

(3) 理事 2名